Nagoya J. Health, Physical Fitness, Sports Vol.31, No.1 (March 2008)

スポーツにおける達成目標理論の展望

A Review of Achievement Goal Theory in Sport

西　田　　保*　　小　縣　真　二**

Tamotsu NISHIDA*　　Shinji OGATA**

Achievement goal theory has been attracting growing attention in the sports realm as well as educational settings. This study reviews recent developments in achievement goal research, focusing on sport settings in particular. Achievement goal theory posits two types of goals, one related to the development of competence and task mastery, called "mastery goal," and the other related to demonstrating ability to perform when compared to others, called "performance goal." Studies until now have shown a positive correlation between mastery and motivation variables, and it was believed that mastery goal was desirable for fostering intrinsic motivation. Recently, however, performance goal has undergone a reappraisal, and the correlation is no longer considered to be negative. Research has been conducted outside Japan on the interaction between motivational climate and achievement goals, but the topic has yet to be explored in Japan. Motivational climate provides an effective strategy for setting achievement goals, and further studies on this topic that take into account cultural differences need to be undertaken in Japan.

はじめに

スポーツにおける動機づけ研究で最近注目されているのが、達成目標理論（achievement goal theory）である。この理論は、人間の達成行動に対する有能さ（competence）を中核として概念化されたものであり、動機づけの強さは個人が達成場面で設定する目標の種類や意味づけによって規定されると考えられている。スポーツで例えれば、「次の大会で優勝する」「新しい技能を獲得する」といった個人が設定した目標を通して、それらの状況を解釈したり、努力した結果を評価したり、それに伴う感情を高めたりすることによって、動機づけが影響されるということである。達成目標は、行動の方向性や選択に関わる概念であることから、スポーツ行動の喚起や継続に重要な意味を持っていると考えられる。

本稿では、達成目標の概念や理論を説明した後に、スポーツを対象としたこれらの研究を中心にレビューする。そして、それらを踏まえた上で、スポーツにおける達成目標研究の今後の方向性について言及することにしたい。

達成目標

達成目標に関する研究は、Ames（1984）、Nicholls（1984）、Dweck（1986）によって提唱された理論的な枠組みによって行われている。達成目標理論においては、人は自らが有能であることを実感したいという有能感への欲求を持っていることを前提とし、自分自身の有能感を感じるために達成目標を設定する。そして、どのような信念に基づいてどのような達成目標を持つのかによって、達成場面における行動や感情が決められるとされている。

達成目標に関する研究では、達成場面においてどのように有能感を感じようとするのかによって、２種類の異なった達成目標が考えられている。１つは、熟達目標（mastery goal）あるいは学習目標（learning goal）と呼ばれ、自己の能力の向上やそれに向けての努力によっ

＊　名古屋大学総合保健体育科学センター
＊＊　名古屋大学総合保健体育科学センター研究生
＊　Research Center of Health, Physical Fitness and Sports, Nagoya University
＊＊　Research Student, Research Center of Health, Physical Fitness and Sports, Nagoya University

表1　達成目標と行動パターン（Dweck, 1986より作成）

知能観	目標	現在の能力の自信	行動パターン
固定理論	成績目標	高い	熟達志向
		低い	無力感
増大理論	熟達目標	高い	熟達志向
		低い	熟達志向

て有能感を得ることが想定されている目標である。例えば、「自己ベストを更新する」「新しいフォームを完成させる」といった目標である。このような目標では、技術の向上や努力といった「過程」を重視し、自己の中にある絶対基準で成功あるいは失敗を判断している。他の１つは、成績目標（performance goal）あるいは遂行目標であり、他者に自己の高い能力を示すことによって有能感を得ようとする目標である。「試合で優勝する」「チームで１番になる」といったものである。これらの目標は、勝利や競争によって自己の能力の高さを誇示する、あるいは自己の能力が低いと判断されることから回避するといった「結果」を重視し、他者比較による相対的な基準で成功や失敗が判断されている。そして、人は達成場面において、このどちらかあるいは両方の目標を採用し、それに基づいて達成場面における行動や感情が決定されると考えられている。なお、本稿では、これらの目標を、熟達目標、成績目標として記述することにする。

どのような達成目標を持つのか、それがどのような達成行動に結びつくのかは、自己の能力をどのような存在として捉えるかによって左右される。Dweck(1986)は、知能観（theory of intelligence）という概念を用いて、これらの関係を示している（表１参照）。ここでは２つの知能観が想定されている。１つは固定的知能観(entity theory）であり、知能（能力）は制御不可能で変化しないものとして捉えられている。従って、そのような知能観を持った人は、生まれ持った能力の高さを誇示しようとする成績目標を設定する傾向が強いと考えられる。他の１つは増大的知能観（incremental theory）であり、知能（能力）は統制可能で成長するスキルの集合であると捉えられていることから、この知能観を持つ人は能力を向上させようとする熟達目標を持ちやすいとされている。

成績目標を設定した場合、自己の能力認知が相対的に高いと認知したときには、成功できる可能性が高いことから熟達志向的な行動パターンを示すと考えられる。しかしながら、自己の能力認知が低い場合には、失敗の可能性が高いと考えることから、結果を重視する成績目標への取り組みは意欲的に行われないと考えられる。これに対して熟達目標では、自己成長のために努力すること自体が成功としてみなされるので、能力の高低は成功に影響しないものとして考えられている。そのため、自己の能力をどのように認知しても熟達志向的な行動パターンを示すとされている。要約すると、熟達目標を設定した場合は、能力認知の高低に関わらず適応的な動機づけを示すが、成績目標の場合には、能力認知が調整変数として働き、能力認知が高いと熟達志向的であるが、低いと無力感を感じて行動を起こさなくなるということである。

以上述べてきたように、熟達目標と成績目標は、「過程」と「結果」がそれぞれ重視されていることから、両者は一連続体上で互いに対立していると捉えられがちである。しかしながら、課題志向（熟達目標）と自我志向（成績目標）は互いに独立した直交関係であるとの報告があり（Duda, 1989)、両方の目標を同時に持つことは矛盾したことではないとの指摘もみられている（仁科・伊藤, 2001)。

達成目標に関する研究

達成目標が行動や感情に関わる様々な諸変数にどのような影響を与えるのかを検討した研究が、学業場面あるいはスポーツ場面を対象として行われてきた。それらの多くは、達成目標を状況によって変化するものではなく、ある程度不変な個人の特性（達成目標を持ちやすい傾向）としての目標志向性（goal orientation）として取り扱っている。スポーツ場面における研究では、Duda（1989）のTEOSQ（Task and Ego Orientation in Sport Questionnaire)、Roberts & Balague（1991）のPOSQ（Perceptions of Success Questionnaire）が、原語あるいは各国で翻訳され使用されている。

初期の研究では、目標志向性および動機づけ雰囲気（motivational climate）と成功の帰属信念との関係で多くの研究が行われた（Duda & Nicholls, 1992)。それは、２つの達成目標の特徴を明らかにするうえで、成功の原因をどこに帰属するのかが非常に重要な問題であっ

たからであると思われる。それらの研究結果では、熟達目標と成功は努力によるものであるという信念との関係が一貫して示されてきた。それに対して、成績目標は能力が成功に重要であるという信念とのつながりで示されてきた。これらの結果は、以下のように解釈される。前項で示したように、達成目標は知能（能力）観と関係している。努力により能力は際限なく伸びるという増大的知能観を持ち、自己の能力を向上させることを目指した熟達目標を持っている場合には、自己の能力が向上して成功を感じるとき、それは努力によるものであると考えるであろう。従って、熟達目標は努力といった成功の帰属信念と関係があると考えられる。それに対して、能力は生得的に決定しているという固定的知能（能力）観を持ち、他者より能力が高いことを示そうとする成績目標を持っている場合には、他者より高い能力を示して成功を感じるとき、それは生まれ持った能力が他者を上回っていたためであると考える。そのために、成績目標は能力といった成功の帰属信念と関係があるということである。

達成目標と学習方略との関係は、学業場面（Ames & Archer, 1987；上淵, 1995）、スポーツ場面（Duda et al., 1995；遠藤・広瀬, 2003）ともに多くの研究が行われており、一貫して熟達目標が効率的な学習方略の使用を促進するという結果が得られている。その一方で、成績目標の及ぼす影響は研究によって結果が異なっており、自己効力感が低い場合には無力感型の行動パターンを示すという先述の Dweck（1986）のモデルは、完全には支持されていない。しかし、遠藤・広瀬（2003）の研究では、熟達目標と成績目標の両方を高く持っている方が、熟達目標だけを高く持っている場合よりも、効果的な学習方略を使用しているという結果が得られており、両目標の比較や組み合わせで分析していくことも必要であると考えられる。

また、達成目標と意欲や不安といった感情面の変数との関係も検討されている。スポーツ場面では、Ryan（1982）の IMI（Internal Motivation Inventory）を用いて、課題志向（熟達目標）が興味（interest）や楽しさ（enjoyment）と正の相関を持つことが示されている（Duda, 1989）。日本においても、熟達目標と競技意欲の正の関係が示されているが（仁科・伊藤, 2001）、成績目標との関係では一貫した結果が得られていない。同様に、不安を対象とした Roberts（1986）は、達成目標は競技前、競技中、競技後の不安に影響し、熟達目標を持っている選手は競技不安が低く、成績目標を持っている選手は競技不安が高いと報告しているのに対して、Vealey & Campbell（1988）の研究では、課題志向性と状態不安との負の相関は示されたが、自我志向性と状態不安との間には有意な相関は示されなかった。また、Newton & Duda（1995）においては、不安と目標志向性との間に有意な関係が示されていないことから、これまでの研究ではこれらの間に一貫した結果は得られていないようである。

さらに、スポーツ場面では、スポーツパフォーマンスとの関係についての研究も行われており（Chi, 1993; Sarrazin et al., 1999）、他の研究結果と同様に熟達目標とパフォーマンスの正の相関が示されている。それに対して、成績目標においては、能力を低く認知し、さらに（あるいは）熟達目標を持っていない場合には、パフォーマンスとの間に負の相関が示されている（Duda & Hall, 2001）。

その他にも、達成目標に関する研究では、セルフ・ハンディキャッピング（Eronen et al., 1998）などへの影響が研究されているが、いずれも一貫して、熟達目標の肯定的な影響、成績目標の否定的な影響が報告されている。

このように達成目標研究では、成績目標における研究結果の不一致な点はあるものの、概して言えば、熟達目標の肯定的な効果と成績目標の否定的な影響が示されてきており、熟達目標が好ましく成績目標は望ましくないという立場が基本として貫かれているように考えることができる。しかしながら、日本のスポーツ選手を対象とした仁科・伊藤（2001）や遠藤・広瀬（2003）の研究では、能力認知の高低に関わらず、成績目標だけを持っている場合の方が両方の達成目標を持っていない場合よりも達成動機づけや練習方略の使用頻度などが高いという結果が示されている。また、両方の目標を持っている場合に達成動機づけや効果的な練習方略の使用頻度などが最も高いという結果も示されており、成績目標による肯定的な影響が指摘されている。従って、スポーツ場面においては、熟達目標だけでなく成績目標の肯定的な側面にも目を向けてさらに検討していくことが必要であろう。

達成目標研究の最近の動向

達成目標を単純に２つに分けるのではなく、これまでと異なる視点からさらに分割する、あるいは社会的な関係を重視した目標（social goal）も加えて考察すべきであるという立場が現れている。このような主張は、達成目標を熟達目標と成績目標に分ける２目標説（dichotomous framework）に対して、多目標説と呼ばれるものである（Urdan & Maehr, 1995）。

Elliot ら（Elliot & Harackiewicz, 1996; Elliot & Church, 1997）は、達成目標を三分あるいは四分して研究す

ることが必要であるとしている。彼らは、Atkinson & Feather（1966）の達成動機づけ理論で示された達成を目指す接近欲求と失敗を回避しようとする回避欲求の枠組みに依拠して、成績目標を、接近欲求に基づいてよい成績をあげることを目指し、他者に自分の高い能力を示そうとする「成績－接近目標（performance-approach goal）」と、失敗を恐れて、他人より低い自分の能力を示してしまうことを避けようとする「成績－回避目標（performance-avoidance goal）」に分類できると考えた。そして、達成目標として、これらに「熟達目標」を加えた理論（３目標視点：trichotomous achievement goal framework）を主張した。Elliot & Church（1997）は、成績－接近目標と成績－回避目標の根底にあるものの１つとして能力認知をあげ、能力認知が高い場合には、達成できる可能性が高いと判断することから成績－接近目標を持ちやすいが、能力を低く認知している場合には、失敗してしまう可能性が高いと判断するので成績－回避目標を持つ傾向があるとしている。そして、成績－接近目標を持てば熟達志向型、成績－回避目標であれば無力感型の行動パターンを示しやすいと考えられている（Elliot & Church, 1997）。

これまでの研究において、成績－接近目標とパフォーマンス、効果的な練習方略の使用、内発的動機づけとの間に正の関係、成績－回避目標とそれらの間には負の関係が示されている（Elliot & Church, 1997; Shih, 2005）。先述した成績目標の一貫しない結果は、このような分類を考慮しなかったためではないかと推察される。この理論では、その理論的背景からすると、２（熟達・成績）×２（接近・回避）の４分割で達成目標を捉えることも考えられるが、熟達目標の回避的側面を示すことが困難であることから、このような視点に立った研究はあまり行われていないのが現状である（Conroy et al., 2003）。

また、Maehr ら（Anderman & Maehr, 1994; Urdan & Maehr, 1995）は、学習は友人や教師などの他者との関係によって影響を受けるため、良好な社会的関係を築くことを目標とする社会的目標が学習に正の影響を与えていることを示している。そして、達成目標とこれらの社会的目標との関係を検討する必要があると主張している。しかし、その後は追跡研究が見られず、両者の関係については明確にされていない。この視点に立った今後の検討が期待される。

動機づけ雰囲気

達成目標は、個人内の要因だけでなく、達成行動に従事する環境によっても影響される。Ames（1992b）は、環境の構造（雰囲気）をどのように感じているかによって達成目標の持ち方が影響されると考え、環境が熟達や努力を重視するものであると認知すると、熟達目標を持ちやすくなり、他者との比較や成績を重視する環境であると感じれば、成績目標を持ちやすくなるとしている。そして、このような達成目標に影響する環境の構造（雰囲気）を「動機づけ雰囲気（motivational climate）」と名付けたのである。例えば、あるスポーツ集団に対して、「努力することが強調され、評価される」「失敗を恐れず、成長のために挑戦するように指導される」といった環境であると感じていれば、その選手は熟達目標を持ちやすくなると考えられる。そのような環境を、「熟達雰囲気（mastery climate）」と呼ぶ。それに対して、「試合での結果ばかりが評価される」「選手のミスで試合に負けたら罰が与えられる」といった環境であると感じているならば、成績目標を持ちやすくなり、そのような環境は、「成績雰囲気（performance climate）」と呼ばれる。

Ames（1992a）は、動機づけ雰囲気は多面的であると考え、Epstein（1989）が提案した TARGET 構造を用いて、熟達雰囲気と成績雰囲気の特徴を明確にしている。TARGET 構造とは、Task（課題）、Authority（権威）、Recognition（承認）、Grouping（集団）、Evaluation（評価）、Time（時間）の略である。例えば、熟達雰囲気の場合には、興味を刺激する挑戦的な活動が推進され（Task）、決定権や課題の選択権を持ち（Authority）、満足感や成功は個々の進歩や努力によって感じられ（Recognition）、協同学習や仲間とのふれあいの機会が与えられ（Grouping）、個人の進歩や熟達によって評価され（Evaluation）、個人の必要に応じて学習活動に割り当てられる時間が調整される（Time）と感じられるのである。Ames（1992a）は、これらを簡略化して、課題・評価・権威の３次元にまとめ、それに基づいて熟達目標を支援する教室の目標構造と教授方略を提唱している。

動機づけ雰囲気に関する研究

Seifriz ら（1992）は、スポーツにおける動機づけ雰囲気を測定する尺度として、PMCSQ（Perceived Motivational Climate in Sports Questionnaire）を開発した。この尺度を用いた研究では、個人の目標志向性とは異なり、熟達雰囲気と成績雰囲気の間には負の相関が示され（Walling et al., 1993）、両雰囲気の関係は互いに独立した直行の関係ではなく、相反するものであると捉えられた。「失敗は成長につながると考えられている」という熟達雰囲気と「失敗したら罰を与えられる」という成績雰囲気は同時に存在することはないというこ

とである。その後に行われた研究でも一貫して、熟達雰囲気と成績雰囲気の間に負の相関が示されている（伊藤，1997; Ommundsen et al., 1998; Standage et al., 2003）。

Newton ら（2000）は、Ames（1992a）の提唱した動機づけ雰囲気の多面性を取り入れて PMCSQ を改良し、熟達雰囲気と成績雰囲気にそれぞれ３つの構成要素を設定した PMCSQ-2を開発した。熟達雰囲気の構成要素は、「重要な役割（能力の高さに関係なく、チームに所属する全ての選手がチームにおいて重要であり、それぞれの役割を担っていると考えられている）」、「努力／上達（努力することや技術を向上させることが重要であると強調され評価されている）」、「協調学習（チームメイト同士が互いに協力しあいながら練習している）」の３要素である。また、成績雰囲気の構成要素は、「不平等な扱い（能力の高い一部の選手だけが優遇され、能力の低い選手は努力しても認めてもらえない）」、「失敗への罰（試合などで失敗したら必ず罰が与えられる）」、「チーム内競争（チーム内で選手同士がお互いを上回ろうと競争しあうことが奨励されている）」といった３要素である。スポーツ選手が、所属チームにおいてこれらの要素を感じることにより、熟達目標や成績目標を持ちやすくなるとされている。また、Vazou ら（2005）の面接調査の研究では、仲間が生み出す動機づけ雰囲気が検討され、それらは多次元構造（向上、同等の扱い、関係性支援、失敗、協調、努力、チーム内競争、能力、自律性支援、能力の評価、チーム内衝突の11次元）であることが明らかにされた。この他にも、Ntoumanis & Vazou（2005）のチームメイトが生み出す動機づけ雰囲気を測定する尺度（Peer MCYSQ: Peer Motivational Climate in Youth Sport Questionnaire）の開発において、動機づけ雰囲気の多面性に着目した研究が行われている。

動機づけ雰囲気においても、個人の達成目標と同様に様々な諸変数への影響が研究されてきた。例えば、成功帰属信念、学習方略の使用（ともに Ommundsen & Roberts, 1999）、IMI（Kavussanu & Roberts, 1996）、不安（Papaioannou & Kouli, 1999）などへの動機づけ雰囲気の影響が研究されたが、いずれも個人の達成目標の結果と同様に、一貫して熟達雰囲気の肯定的な影響が示された。また、成績雰囲気に関しては、個人の達成目標の場合よりもより明確に一貫して否定的な変数との関係が示された。また、バーンアウト（Chi & Chen, 2003）、ストレス（Pensgaard & Roberts, 2000）、スポーツパーソンシップ（Miller et al., 2004）などの変数との関係も研究されたが、ここでも熟達雰囲気には肯定的な結果が、そして成績雰囲気には否定的な結果が示されていた。

また、当初、動機づけ雰囲気は、指導者（教育場面では教師、スポーツ場面ではコーチ）によって生み出されるものとして考えられ研究されていた。しかし、その後は指導者以外の重要な他者によって生み出される動機づけ雰囲気についても関心が向けられるようになり、スポーツ場面では、コーチ以外に、体育教師（Papaioannou, 1994）、両親（White, 1998）、チームメイト（Vazou et al., 2005）などによる動機づけ雰囲気が検討されている。

しかし、これらの研究の多くは欧米を中心とした海外で行われたものであり、日本における研究はそれほど多くはない。学業場面においては目標構造としての研究がいくつか見られるが（鹿毛・上淵・大家，1997；黒沢・上淵，2004）、スポーツ場面ではあまり見られていない（伊藤，1997；藤田・杉原，2007）。体育の授業や部活動に限らず、競技スポーツから健康スポーツにいたる多くのスポーツ活動が集団で行われていることからすると、スポーツにおける動機づけ雰囲気に関する研究は、今後より深く研究される必要がある。

動機づけ雰囲気研究の最近の動向

スポーツ場面の動機づけ雰囲気に関する研究によって、熟達雰囲気の諸変数への肯定的な影響が明らかにされた。その後は、それらの研究に加えて、体育の分野において具体的に熟達雰囲気を促す教授方略とその効果を検討する介入研究が多くみられている（Solmon, 1996; Papaioannou & Kouli, 1999; Treasure & Roberts, 2001; Wallhead & Ntoumanis, 2004）。例えば、Digelidis ら（2003）の中学生を対象とした縦断的研究では、Ames（1992a）の３次元構造や Epstain（1989）の TARGET 構造に基づいて熟達雰囲気が形成されるように作成された９つの内容の介入プログラムを１年間継続することによって、熟達雰囲気を促進しようと試みた。その結果、介入群は統制群よりも、熟達雰囲気、熟達目標、運動に対する態度などが高くなったことが示され、介入実践の効果が確認された。しかしながら、10か月後の事後テストではその効果がなくなっており、介入効果がその後も持続するようなプログラムの開発あるいはそのような視点を持った研究が望まれる。

従来の動機づけ雰囲気の研究は、２目標説に依拠して研究されてきたため、熟達雰囲気と成績雰囲気の２要素で諸変数への影響が検討されてきた。しかしながら、その後において達成目標の多目標説が研究されるようになると、Papaioannou（2007）は、「熟達雰囲気」「成績－接近雰囲気」「成績－回避雰囲気」「社会的接近目標の雰囲気」という４要素を想定した体育における動機づけ雰囲気尺度を開発した。そして、熟達雰囲気

と社会的接近目標の雰囲気が、内発的動機づけを促進することが示された。また、和訳したPMCSQを用いた伊藤（1997）の研究においても、探索的因子分析の結果、成績雰囲気は「成績雰囲気A」と「成績雰囲気B」の２因子に分かれて抽出されている。「成績雰囲気A」は、「他の部員より上手なことが大切である」「一番大事なことは、最終結果（勝つか負けるか）である」といったように、競争や結果における成功が強調された成績－接近目標につながると思われる項目が含まれているのに対して、「成績雰囲気B」では、「監督は、上手な部員だけを注目する」「ミスをした選手は、試合からはずされる」のように、能力の低さや失敗による不利益が強調された成績－回避目標を想定させる項目となっている。従って、「成績雰囲気A」は成績－接近雰囲気を、「成績雰囲気B」は成績－回避雰囲気を示すものであると考えられることから、成績雰囲気は２つに分けられることを示唆している。前述したように、個人の達成目標の研究結果では、成績－接近目標はパフォーマンスや内発的動機づけと正の関係が示されていることからすると、動機づけ雰囲気でもこれと同様の結果が得られると予想される。これを裏づけるように、伊藤（1997）の研究では、「成績雰囲気B」が適応感と負の関係を示したのに対し、「成績雰囲気A」は負の影響を示さなかった。今後は、測定尺度の精緻化や諸変数との関連性をさらに検討すると共に、体育場面に限らず競技スポーツ場面への適用などを考慮した研究などが求められるであろう。

達成目標理論の今後の展望

達成目標理論に関する研究を概覧してきたが、これまでの動機づけに関する研究において文化的差異（Iyengar & Lepper, 1999；宮本・加藤，1975; Nishida, 1991; Nishida et al., 2007）が指摘されてきたことからすると、今後は日本の文化を視野に入れた研究が期待される。例えば、達成目標や動機づけ雰囲気に関するこれまでの研究の多くは、欧米を中心としてなされており、一般的には、内発的動機づけを高めるには、成績目標よりも熟達目標、自我志向よりも課題志向、成績雰囲気よりも熟達雰囲気の方が望ましいとされている。また、課題志向性と自我志向性との間に相関はないと言われているが（Duda, 1989）、日本の研究では正の相関（細田・杉原，1999）が報告されており、ここに文化的な差異が認められる。これは、日本の場合には両方の志向性を持つことが可能であり、その方が高い動機づけに結びつくということも十分に予想される。従って、今後は特にスポーツ場面における動機づけ雰囲気の研究がほとんど行われていない現状からも、日本の文化を視野に入れた分析を行うことが必要である。それによって日本の子どもや選手に特有な動機づけ理論の構築あるいは有効な動機づけ方略の提言が可能になってくると考えられる。

また、動機づけ研究の応用性・実践性という視点からすると、得られた知見をスポーツ現場に適用することが求められる。例えば、基礎的な研究によって熟達目標や熟達雰囲気が子どもの内発的動機づけを高めるといったことが明らかになった場合、次の段階としてそれらの目標や雰囲気を高める実践的な研究が必要になってくるであろう。その際には、どのようにして熟達目標を持たせるのか、あるいはどのような方法で熟達雰囲気を作り出していくのかといった方法論の検討も必要になってくる。達成目標理論（特に動機づけ雰囲気）に関する研究が、欧米だけでなく日本においても広く行われることと合せて今後の課題として指摘しておきたい。

引用文献

Ames, C. (1984) Competitive, cooperative, and individualistic goal structures: A motivational analysis. In R. Ames & C. Ames (Ed.), *Research on motivation in education: Student motivation*, 177–207. New-York: Academic Press.

Ames, C. (1992a) Classroom: Goals, structures, and student motivation. *Journal of Educational Psychology*, 84, 261–271.

Ames, C. (1992b) Achievement goals, motivational climate, and motivational processes. In G. Roberts (Ed.), *Motivation in sports and exercise*, 161–176. Champaign, IL: Human Kinetics.

Ames, C., & Archer, J. (1987) Mother's belief about the role ability and effort in school learning. *Journal of Educational Psychology*, 79, 409–414.

Anderman, E. M., & Maehr, M. L. (1994) Motivation and schooling in the middle grades. *Review of Educational Research*, 64, 289–309.

Atkinson, J. W., & Feather, N. T. (1966) *A theory of achievement motivation*. New York: Wiley.

Chi, L. (1993) *Prediction of achievement-related cognitions and behaviors in the physical domain: A test of theories of goal perspective and self efficacy*. Unpublished doctoral dissertation, Purdue University, West Lafayette, IN.

Chi, L., & Y-L, Chen. (2003) The relationships of goal orientation and perceived motivational climate to burnout tendency among elite basketball players. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, 25, S40–S41.

Conroy, D. E., Elliot, A. J., & Hofer, S. M. (2003) A 2 x 2 achievement goals questionnaire for sport: Evidence for factorial invariance, temporal stability, and external validity. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, 25, 456–476.

Digelidis, N., Papaioannou, A., Laparidis,K., & Christodoulidis, T.

(2003) A one-year intervention in 7th grade physical education classes aiming to change motivational climate and attitudes towards exercise. *Psychology of Sort and Exercise*, 4, 195–210.

Duda, J. L. (1989) Relationship between task and ego orientation and the perceived purpose of sport among high school athletes. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, 11, 318–335.

Duda, J. L., Chi, L., Newton, M. L., Walling, M. D., & Catley, D. (1995) Task and ego orientation and intrinsic motivation in sport. *International Journal of Sport Psychology*, 26, 40–63.

Duda, J. L., & Hall, H. (2001) Achievement goal theory in sport: Recent extensions and future directions. In R. N. Singer, H. A. Hausenblas, & C. M. Janelle (Ed.), *Handbook of sport psychology*, 417–443. New-York: Wiley.

Duda, J. L., & Nicholls, J. G. (1992) Dimensions of achievement motivation in schoolwork and sport. *Journal of Educational Psychology*, 84, 1–10.

Dweck, C. S. (1986) Motivational processes affecting learning. *American Psychologist*, 41, 1040–1048.

Elliot, A. J., & Church, M. A. (1997) A hierarchical model of approach and avoidance achievement motivation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 72, 218–232.

Elliot, A. J., & Harackiewicz, J. M. (1996) Approach and avoidance achievement goals and intrinsic motivation: A mediational analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 461–475.

遠藤俊郎・広瀬　功（2003）目標志向性と学習方略との関係—柔道選手に着目して—．山梨大学教育人間学部紀要，5，59－67.

Epstein, J. (1989) Family structures and student motivation: A development perspective. In C. Ames and R. Ames (Ed.), *Research on motivation in education*, 259–295. New-York: Academic Press.

Eronen, S., Nurmi, J-E., & Salmela-Aro, K. (1998) Optimistic, defensive-pessimistic, impulsive and self-handicapping strategies in university environment. *Learning and Instruction*, 8, 159–177.

藤田　勉・杉原　隆（2007）大学生の運動参加を予測する高校体育授業における内発的動機づけ．体育学研究，52，19－28.

細田朋美・杉原　隆（1999）体育の授業における特性としての目標志向性と有能さの認知が動機づけに及ぼす影響．体育学研究，44，90－99.

Iyengar, S. S., & Lepper, M. R. (1999) Rethinking the value of choice: A cultural perspective on intrinsic motivation. *Journal of Personality and Social psychology*, 76, 349–366.

伊藤豊彦（1997）スポーツにおけるチームの動機づけ雰囲気に関する研究．山陰体育学研究，12，21－30.

鹿毛雅治・上淵　寿・大家まゆみ（1997）教育方法に関する教師の自律性支援の志向性が授業過程と児童の態度に及ぼす影響．教育心理学研究，45，192－202.

Kavussanu, M., & Roberts, G. C. (1996) Motivation in physical activity context: The relationship of perceived motivational climate to intrinsic motivation and self-efficacy. *Journal of Sport & Exercise Psychology*, 18, 254–280.

黒沢奈津美・上淵　寿（2004）子どもの達成目標と目標構造の関係．東京学芸大学紀要第１部門教育科学，55，75－79.

Miller, B. W., Roberts, G. C., & Ommundsen, Y. (2004) Effect of motivational climate on sportspersonship among competitive youth male and female football players. *Scandinavian Journal of Medicine and Science in Sports*, 14, 193–202.

宮本美沙子・加藤千佐子（1975）達成動機と親和動機の関係について．日本女子大学紀要，家政学部，22，23－28.

Newton, M., & Duda, J. L. (1995) The relationship of goal orientations and expectations on multi-dimensional state anxiety. *Perceptual and Motor Skills*, 81, 1107–1112.

Newton, M., Duda, J. L., & Yin, Z. (2000) Examination of psychometric properties of the Perceived Motivational Climate in Sport Questionnaire-2 in sample of female athletes. *Journal of Sports Sciences*, 18, 275–290.

Nicholls, J. G. (1984) Achievement motivation: Conception of ability, subjective experience, task choice, and performance. *Psychological Review*, 91, 328–346.

Nishida, T. (1991) Achievement motivation for learning in physical education class: A cross-cultural study in four countries. *Perceptual and Motor Skills*, 72, 1183–1186.

Nishida, T., Isogai, H., Åström, P., Karp, S., & Johansson, M. (2007) Cross-cultural comparison of motivation to learn in physical education: Japanese vs Swedish schoolchildren. *Psychological Reports*, 101, 597–613.

仁科貞晶・伊藤豊彦（2001）陸上競技選手における目標志向性と競技意欲との関連．山陰体育学研究，15，17－24.

Ntoumanis, N., & Vazou, S. (2005) Peer motivational climate in youth sport: Measurement development and validation. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, 27, 432–455.

Ommundsen, Y., & Roberts, G. C. (1999) Effect of motivational climate profiles on motivational indices in team sport. *Scandinavian Journal of Medicine and Science in Sports*, 9, 333–343.

Ommundsen, Y., Roberts, G. C., & Kavussanu, M. (1998) Perceived motivational climate and cognitive and affective correlates among Norwegian athletes, *Journal of Sports Sciences*, 16, 153–164.

Papaioannou, A. (1994) Development of a questionnaire to measure achievement orientations in physical education. *Research Quarterly for Exercise and Sport*, 65, 11–20.

Papaioannou, A. (2007) Measuring perceived motivational climate in physical education. *Journal of Teaching in Physical Education*, 26, 236–259.

Papaioannou, A., & Kouli, O. (1999) The effect of task structure, perceived motivational climate, and goal orientations on students' task involvement and anxiety. *Journal of Applied Sports Psychology*, 11, 51–71.

Pensgaard, A. M., & Roberts, G. C. (2000) The relationship between motivational climate, perceived ability and sources of distress among elite athlete. *Journal of Sports Sciences*, 18, 191–200.

Roberts, G. C. (1986) The perception of stress: A potential source and its development. In M. R. Weiss & D. R. Gould (Ed.), *Sport for children and youth*, 119–126. Champaign, IL: Human Kinetics.

Roberts, G. C., & Blague, G. (1991) *The development and validation of success questionnaire*. Paper presented at FEPSAC Congress, Cologne, Germany.

Ryan, R. M. (1982) Control and information in the interpersonal sphere: An extension of cognitive evaluation theory. *Journal of Personality and Social Psychology*, 43, 450–461.

Sarrazin, P., Cury, F., & Roberts, G. (1999) Exerted effort in climbing as a function of achievement goals, perceived ability, and task difficulty. In V. Hosek, P. Tilinger, & L. Bilek (Ed.), *Achievement and motivation: A social development perspective* (PP.138–140). Cambridge, MA: Cambridge University Press.

Seifriz, J. J., Duda, J. L., & Chi, L. (1992) The Relationship of Perceived Motivational Climate to Intrinsic Motivation and Beliefs About Success in Basketball. *Journal of Sports & Exercise Psychology*, 14, 375–391.

Shih, S. S. (2005) Role of achievement goals in children's learning in Taiwan. *Journal of Educational Research*, 98, 310–319.

Solmon, M. A. (1996) Impact of motivational climate on students' behaviors and perceptions in a physical education setting. *Journal of Educational Psychology*, 88, 731–738.

Standage, M., Duda, J. L., & Ntoumanis, N. (2003) Predicting motivational regulations in physical education: the interplay between dispositional goal orientations, motivational climate and perceived competence. *Journal of Sports Sciences*, 21, 631–647.

Treasure, D. C., & Roberts, G. C. (2001) Students' perceptions of motivational climate, achievment beliefs, and satisfaction in physical education. *Research Quarterly for Exercise and Sport*, 72, 165–175.

上淵　寿（1995）達成目標志向性が教室場面での問題解決に及ぼす影響．教育心理学研究，43，392－401.

Urdan, T., & Maehr, M. L. (1995) Beyond a two-goal theory of motivation and achievement: A case for social goals. *Review of Educational Research*, 65, 213–243.

Vazou, S., Ntoumanis, N., & Duda, J. L. (2005) Peer motivational climate in youth sport: a qualitative inquiry. *Psychology of Sport and Exercise*, 6, 497–516.

Vealey, R. S., & Campbell, J. L. (1988) Achievement goals of adolescent skaters: Impact on self-confidence, anxiety, and performance. *Journal of Adolescent Research*, 3, 227–243.

Wallhead, T. L., & Ntoumanis, N. (2004) Effects of a sport education intervention on students' motivational responses in physical education. *Journal of Teaching in Physical Education*, 23, 4–18.

Walling, M. D., Duda, J. L., & Chi, L. (1993) The perceived motivational climate in sports questionnaire: Construct and predictive validity. *Journal of Sports & Exercise Psychology*, 15, 172–183.

White, S. A. (1998) Adolescent goal profiles, Perceptions of the parent-initiated motivational climate and competitive trait anxiety. *The Sport Psychologist*, 12, 16–33.

（2007年12月26日受付）